

よりよく生活するための支援を

今年の夏、リオデジャネイロ・パラリンピックで大勢の選手が活躍したことは、記憶に新しいと思います。選手の中には、義肢を装着してレースに臨む姿も多く見られました。

今回は、自身も装具を使用しながら、義肢装具士として、活躍する一方、アフガニスタンで義肢装具普及のための活動を行っておられる瀧谷 昇さんにインタビューしました。

■瀧谷さんが、義肢装具製作の仕事を始められたきっかけはなんですか？

私が小学1年生の時に、大腿部の怪我がきっかけで、骨髄炎という病気になり、小学3年生まで入院を余儀なくされました。その後、10数回の手術を経て、中学1年生のころ、やっと治癒することができました。ただ、治療期間がちょうど成長期と重なったことで、怪我を負った右足が、度重なる手術等の影響で左足と同じようには成長しなかったため、左右の足の長さが違ってしまったわけです。ですから、右足に足の長さを調節する補装具をつけたのです。その時担当してくれた装具士さんが、とてもかっこよく、憧れの気持ちをいただき「装具士さんになろう!」と思ったわけです。

それに、私は幼少の頃、両親を亡くしましたので進学は難しいと、幼な心にわかっていましたものから、技術で身を立てる義肢装具士なら楽しそうだし、やってみようと将来の進路に決めたのです。

■義肢装具士の仕事について、具体的に教えてください。

私がこの仕事を始めた頃は、戦争で手足を失った方の義手や義足を製作することが多かったのですが、最近では身体に障害のある人のための義肢や、骨折などの治療用の装具など、患者さんに直接装着するもの全般を製作しています。どの義肢装具も、使う方にあわせて、ひとつひとつオーダーメイドで製作しています。また、最近で



は、チェアスキーやスポーツ用義足などの製作もしています。義肢というのは、失われた身体の一部に装着して、身体の機能を代用するもの、装具は、身体の機能障害を補う目的で用いる用具のことをいいます。

■義肢装具士の仕事のやりがいについて、教えてください。

どんな仕事でも同じだと思いますが、使う人にとって使いやすく、気に入ってもらえる製品を完成させることです。あたり前のことですが、使う人によってそれぞれに違うオーダーを、コミュニケーションをとりながら、よりの確に製品に反映できるか、また、必要な情報をいかに多く集めることができるかということが製品の出来を左右するのです。そのためには身体的な状況を把握するだけでなく、同時に、使う人自身が、どんな生活をしているか、どんな環境におかれているかなどという社会的背景を理解することも必要となってきます。

■アフガニスタンにおける義肢装具普及のための活動を始めたきっかけを教えてください。

私が就職してから7年目の頃、JICA（国際協力機構）から会社に、アフガニスタンで義肢装具に関する技術を教えるための技師を派遣して欲しいとの要請があり、私に白羽の矢が立ったわけです。1974年に、JICAの専門家派遣員として、アフガンを訪れたことが、活動の原点です。私

は現地に自分の技術を教えに行つたつもりでしたが、逆にいろんなことを教わつたというのが実感です。

現地は、日本とはいろんな違いや発展の遅れなどがあったわけですが、アフガンの人々は、日本での私よりも実に豊かな生活をしていて、精神的にもとても自由だったと思います。それまで、「人生は、仕事や技術が第一」と思っていたのですが、実は「私の人生は、家族と共にある」ということを教えられたのです。このことは、私のこの後の人生に大きな影響を与えたと思います。

ですから、そのことに気づかせてくれたアフガンに、いつかお返しをしたいと思います。52歳の時、神戸でアフガンを支援している女性から「アフガンの孤児の女の子に義足をつくってあげてくれないか?」と打診されたのがアフガニスタンへの支援開始のきっかけでした。アフガンを支援したいと思っていたにも関わらず何も行動を起こしていなかったということもあって、始めるなら今だと思い、現在につながっています。

■アフガニスタンにおける活動内容について具体的に教えてください。

2002年にNGOアフガニスタン義肢装具支援の会を立ち上げ、組織としての支援体制を整えました。義肢というのは、使う人それぞれに型をとって製作するので、現地で取った型を一度持ち帰ってボランティアの学生さんたちとだいたい3ヶ月に12、3本のペースで完成させ現地に届けるのです。その時に、次の分の型取りをして持ち帰るという繰り返しです。3ヶ月ペースにしているのは、それ以上期間をおくと、身体の状態が変化してせっかく作った義肢があわなくなってしまう恐れがあるからです。これまでに、およそ320の義肢装具を届けています。

義肢は作ったら終わりというのではなく、徐々に身体が変化してきたり、子どもたちだと成長することで身体に合わなくなってきたりということが起こるので、数ヶ月～数年で使えなくなってしまうこともありま

すから、こまめなメンテナンスが必要です。体型の変化にあわせた微調整もまた息の長い支援が必要な理由のひとつです。

また、私たちの活動がテレビなどで報道されたことで使わなくなった義足が送られてきたり、資金面で援助してくれる団体があったりして、私の活動に賛同してくれる人がいることは、とても心強いことです。

■これからのこと

ボランティア活動というのは、自分の発意であることが大切だと思います。「瀧谷は次、いつ来るのか?」と支援を待っている人がいる限り、続けていきたいと考えています。

資金面でも支援をいただき、義肢装具を作るボランティアものべ200~300人を数えるまでになりました。ボランティアの多くは、義肢装具について学んでいる学生で、授業の中で行う学習とは違い、実際に使う人の顔が見える義肢の製作に関わることが、自分自身にとっても勉強になるといって、続けてきてくれています。今の若者も、誰かのために役に立とうという気持ちを自然に行動に移していて、日本もまだまだ捨てたものじゃないと思います。



Profile

たき たに のぼる
瀧谷 昇さん

- 1948年 吉野郡川上村生まれ。
- 1974年 JACA国際事業団指導教官としてアフガニスタンへ
- 1980年 奈良義肢製作所創立
- 1988年 義肢装具士国家資格取得
- 2001年 アフガニスタンにおける義肢製作
- 2002年 アフガニスタン義肢装具支援の会発足